

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価							福山市立		加茂小		学校				
年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価（10月1日）				最終評価（2月末）				
							□指標に係る 取組状況	プロセス 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期（中期）経営 目標の達成状況	プロセス 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
2	学びを楽しむ・学び を活かす子ども、夢 を語れる・自分のこ とを語れる子どもの 育成	★	新規 ・ 継続	○自分の考えや思い、調 べたこと等を自分の言葉 や自分の文章で表現する ことができる。 ○ふるさとについて考 え、故郷を大切にする思 いをもつことができる。	○教材研究にもとづいた「任せ る、考える・読む・書く」授業 を実践する。 ○毎時間の(自分の考えや思い を)「書く」活動を設定する。 ○年間2枚以上の新聞づくり、 新聞を活用した教育活動を行 う。 ○地域教材の発掘と実践を積み 重ねる。	○「書く」ことにおける アンケート（児童・授業 者）の肯定的解答85%以 上。 ○作文コンクールや新聞 投稿等への取組回数。 ○地域カリキュラムの実 施回数、児童のふるさと 学習に対する評価。	○書く力が伸びたと回答した児童は、 国語87.9%、算数86.0%であった。 ○1学期に全学年新聞コンクールに応 募した。その他のコンクールへの応募 を計画中である。 ○地域学習が好きと答えた児童は 90%であった。遠足や社会見学、野 外活動を通して地域の方と関わる機会 が増えている。	3	3	○書く活動をこれまで通りに設定し、 続けていく。今後は、資料を見て自分 の意見を書く機会を取り入れる。 ○各学年でNIE教育計画を見直し、新 聞投稿や作文コンクールなどへの応募 を1回以上行う。 ○学習の目的を明確にしながら、地域 との連携を図っていく。一小一中の強 みを生かしながら、お互いの取組状況 を交流していく。					
2	安心して楽しく過ご せる、学べる環境づ くり	★	新規	○課題解決のため、また 学校生活の充実のために 話し合いなどを通して考 え、実践する学級をつく る。 ○個の課題をとらえ、組 織的に取り組む。	○話し合い活動（学級会）を毎月 1回以上実施し、児童ととも に、学級活動を充実させる。 ○教職員全員での情報共有と課 題解決のための場を設定する。	○学級会等の実施回数。 ○学級活動に対する児童 アンケートの肯定的解答 85%以上。 ○昨年度比、出席数増 加、欠席数減少。	○何らかの形で月1回は学級会を行っ ている。 ○低学年は90%、高学年は、7 8%。高学年の方が目標に達していな い。 ○昨年度この時期7人、今年度は12 人。12人とも、昨年度末長期欠席に なった児童。今年新規で長期欠席に なった児童は今のところいない。	2	3	○学級会で目指す姿を示す。決まった ことを実行し振り返りを行うことで、 話し合いの意義を高められるようにす る。また、国語科で学んだ『学級会 (よりよい学級にするために)』につい ての学習を関連づかせることで日々の 学級活動にいかしていく。 ○校内支援委員会を活用し、児童、保 護者や外部、学校とのつながりを絶た ないよう連携を密にする。					
2	幼児期から中学校へ の学びをつなぐ幼保 小中連携	★	継続	○就学前施設や中学校と の交流を行い、授業や学 級経営に生かす。 ○幼保小中連携を生かし た授業改善を図る。	○授業交流や授業観察を増や し、教職員の交流や対話の場を 設定する。 ○「ことば」にこだわる学級経 営、授業を実践する。	○幼保小中連携の取組回 数。 ○子どもの姿、授業観察 を通しての見取り。	○幼保小連携の取組み回数8回。 ○昨年度より取組み回数を増やすこと で、幼保の実態を深く知り、成果や課 題を感じることができた。 ○児童も子ども「ことば」にこだわっ ている姿が増えている。分からないこ とをそのままにしない風土ができてい る。	3	3	○夏休みの研修で、幼保小中連携の取 組み内容を学校全体に共有した。その 内容について引き続きPDCAサイクル を回しながら全職員で取り組む。 ○「ことば」だけでなく、「数」にも 注目することで、さらに語彙力を高 め、全教科で話す・書く場面で活用で きるようにする。(例)算数科での説明 や社会科でのグラフの読み取り					
1	教職員が生き生きと 働ける職場づくり	★	継続	○仕事に対する満足感や 充実感を向上させる。 ○時間と質を意識した業 務を推進する。	○教職員の意欲を重視した取組 や研修を実現する。 ○メリハリのある勤務時間の遂 行	○「仕事にやりがいを感じ ている教職員」90%以 上 ○在校時間外勤務、年間 360時間以内	○教職員アンケートにおいて、肯定的 評価は100%であった。 ○教材研究をしてどんな子どもにした いかをイメージして授業をのぞむこと ができた。一方で、時間に追われ話し 合う機会が十分にとれていない。 ○勤務時間を意識して退校時刻を守る ようになってきた。 ○研究教科を体育科に統一したこと で、教職員全体で研究している意識を もちつつある。	3	3	○学年会が個々の時間になりつつある ため、きちんと話すテーマと時間を決 めて連携を強化する。 ○授業研究、学校行事に教職員全員で 取り組み、対話による振り返りを行 う。（継続） ○週2回の定時退校日を確実に守って いく。（継続）					

[プロセス評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。